



ISSN 0385-0838

第 142 号

発行所

亜細亜大学アジア研究所
 東京都武蔵野
 市境 5-24-10
 電話 0422 (54) 3111
 郵便番号 180-8629

経済好調の中で強まる不安

—二〇一一年三月の韓国調査報告—

野 副 伸 一

筆者は去る三月六日から十三日までの七泊八日ソウルに滞在し、ジャーナリスト、研究者、大学教授、脱北者等に会い、様々なテーマで意見交換をした。この韓国訪問は毎年三月に行っており、「韓国の政治、経済、外交、南北関係等の定点・定時観測」となっている。今回は十三回目にあたる。今回は特に、南北関係の現状や北朝鮮のインフラ問題について多くの時間を割いた。滞在中の十一日に東日本大震災が発生し、ソウルでも生々しいニュースに接することができた。

前回の現地調査には、筆者は体調不良で参加できなかった。そのため、今回の訪韓に際しては荷が重く、不安感もあった。しかし韓国へ行

き、知り合いと旧交を温める中で不安感はいっしかり無くなった。多くの人と会うことで、沢山の知識を得、知的好奇心を刺激された。現地調査の醍醐味を改めて噛み締めたのである。

1. 変化激しいソウル中心部

二年ぶりのソウルは、大きく変わっていた。まずホテル事情から紹介したい。よく使うソウル中心部のホテルが予約できなかったため、我々は東大門近くの T ホテルを初めて使った。一年半前にオープンしたというホテルはビジネスホテルで、朝食付き一泊で七万ウォン（約五、四三〇円）であった。少々狭いのが難であったが、室内が清潔で明るいのが有難かった。

目次

- 経済好調の中で強まる不安
—二〇一一年三月の韓国調査報告—
……野副伸一…… (1)
- 内需主導型成長を目指す中国
……小林 照直…… (4)
- ≪二〇一一年一月二十二日のアジア・ウオッチャー≫ からのびよる米中新冷戦
—東アジア緊張の背景……友田 錫…… (6)
- 「国際中堅企業」の登場 (30)
ロシア市場への参入〜華宇工贸(集団) 有限責任公司……西澤 正樹…… (8)
- ベトナムの国際収支構造
……石川 幸一…… (10)
- 『アジアの窓』誤解の多い TPP 論議
……石川 幸一…… (12)

またホテル近くには地下鉄の二号線、四号線、五号線の駅があり、足の便も良かった。足の便という点では、金浦空港からのリムジンバスも、このホテルの真ん前に止まり、便利この上なしであった。料金も片道七、〇〇〇ウォン（約五四〇円）。リムジンバスは空港から市内に入ると幾つかのホテルの前で止まったが、新しいホテルが多いのに驚いた。正にリムジンバスとホテル群が一体化していた。

次に、都市再開発について。昨年再選された呉世勲ソウル市長は初当選の折ソウル市の美化事業を公約として掲げていた。李明博前ソウル市長の清溪川再開発の成功に刺激を受けたものと思われるが、その美化事業は着々と進んでい

た。我々の長年の定宿があった清進洞一帯では、沢山の古い飲食店が撤去されていた。鍾路区庁近くの有名なサンドウブ料理の店（甘村）も教保ビルの傍に新しく建てられたビルの二階に引越し、すっかりきれいになっていった。味が落ちるのではないかと心配しているが、どうであろうか。鍾路に沿って走る史跡でもあるピマッコル（避馬小路）は辛うじて残されていたが、落ち着きの悪い印象があった。

李舜臣將軍の銅像から光化門にかけての世宗路の景色も、大きく変わっていた。李舜臣將軍の銅像と光化門の間に李朝第四代の王様である世宗大王の大きな坐像が新しく置かれていた。また世宗路に面した米国外使館ビルと並んでいた同じ恰好の旧経済企画院ビルは撤去されていた。その跡地には歴史博物館が建設されるようであるが、米韓関係の変化を感じさせるものがある。

世宗路の入り口にある教保ビルも南北の外壁がガラス張りになり、ビルの横に公園が造成され、瀟洒な雰囲気を出していた。古い建物がどんどんなくなっていることは今に始まったことではない。飲食店が密集する武橋洞や茶洞一帯の再開発は以前から行われていたが、今回近くを通った折古いソグムクイ（肉の塩焼き）店が残っているかどうかをわざわざ見に行った。健在であった。胸にジンと来るものがあつた。

2. 好調な経済の影に不安も

韓国経済は輸出の好調もあり、昨年六・

一%の成長を達成した。特に対中輸出の伸び（三四・八%）は大きく、成長のエンジン役割をした。韓国の昨年の輸出について興味深い点は、先進国のシェアが二八・二%（米一〇・七%、日本六・〇%、EU一・五%）に留まり、成長著しい新興工業国のシェアが七一・八%に達していた点である。今回の現地調査で二人の専門家から、三星電子やLG電子の躍進の理由は高品質製品・先進国市場志向の日本型輸出モデルから中品質製品・新興工業国市場志向への転換にある、という指摘を受けた。興味深い点であるので、敢えて指摘しておきたい。なお韓国政府は今年も五%台の成長を予測しており、雇用情勢も大分改善されてきているようである。

とは言え、韓国人と話していると、生活や将来に対する不安には大きいものがある。特に北朝鮮の崩壊とそれに伴う混乱に対する不安が大きいようだ。この点については後述する。当面の不安としては、物価の高騰がある。政府は今年の消費者物価上昇の上限を三%±一%としているが、実際の上昇率は一月には四・一%、二月には四・五%であった。庶民の皮膚感覚では上昇率は一〇%を超えているようである。寒波による野菜価格の高騰、口蹄疫や鳥インフルエンザによる食肉価格の高騰、石油価格の高騰が原因である。韓国銀行は我々が滞在中の三月一〇日に政策金利を二・七五%から三・〇%に引き上げた。三・〇%台は二年三ヶ月ぶりの高さで、「低

金利時代は終焉」と新聞は報道していた。

少子・高齢化問題も韓国人の関心呼び起めている。日本が高齢化社会（六十五歳以上の人口が全人口に占める比率が七%以上の社会）から高齢社会（同十四%以上の社会）になるのに二十四年かかったのに対し、韓国は十八年で来るものと見られている。また今年からベビーブーム世代の退職が始まり、二〇一五年か一六年に生産年齢人口の減少が予想されている。それに伴い、年金問題、老後の生活設計等に韓国人の関心が俄かに高まっている。韓国の有力日刊紙『朝鮮日報』が新年から「百歳シヨック―祝福であるのか、災難であるのか―」の連載を掲載したのもその表れと言えよう。

とは言え、「政府この問題を積極的に取り上げよう」としない。あるジャーナリストに言わせると、「寝た子は起こしたくないからだ」という。韓国は日本と比べ、なお家族の紐帯感が強く、財政事情にも余裕があり、高齢化問題の深刻さが今のところそれ程でもないことが背景にあるようだ。しかし早晩深刻化していくものと見られる。

3. 大統領選挙の行方

大統領選挙は来年であるが、気の早い韓国のマスコミは人気投票とも言うべき世論調査を既に実施している。各種世論調査では、今のところ朴権恵ハンナラ党元代表が三〇%台の圧倒的支持率を誇っている。そ

れに對し、二番手以下はどんぐりの背比べになつてゐる。だからと言つて、朴権恵が最終的に當選すると明言する人はいなかった。これまでの選挙で序盤で高い支持率を誇る候補がこけることがよくあるからでもある。朴権恵の強みとしては、知名度（朴正熙の娘）、政治家としてのキャリア、品格、大衆的人気が挙げられる。弱みとしては、女性であること、政策に弱いこと、党内基盤が弱いことが指摘されている。また対北スタンスがはっきりしないとの批判も一部にある。

野党候補としては柳時敏を推す声もあった。「盧武鉉二世」との評価の高い民主黨議員は、若い世代に人気がある。但し、柳に可能性があるとすれば、孫鶴圭民主黨代表との候補一本化の成功が前提であるという。

いずれにしても、来年本格化する大統領選挙は、これまでがそうであつたように、与野党内の分裂、スキャンダルの暴露、南北関係の展開、さらに来春に予定される総選挙の結果等、様々な変数を織り込みながら展開していくだろう。

4. 南北関係の現状

李明博政権の対北スタンスは強硬である。それを象徴するのが千英宇青瓦台外交安保首席の発言（一月十四日）であろう。千首席は米テレビとの会見で、「我々は北朝鮮に十分な制裁をしなかつた。北が天安艦撃沈事

件や延坪島攻撃事件に對し、誠意ある措置を採つてこそ対話が可能である」とし、十九日に予定されていた米中首脳会談へ牽制球を投げた。千首席はまた「北朝鮮の変化のための内部のエネルギーは大きくなつており、このままでは持ち堪えられないだろう。北が軍隊とミサイル、核兵器プログラムに予算を投入すれば、北の消滅に通じる近道になるだろう」との判断も示した。

実際李明博政権になつてからの南北関係は、大きく冷え切つてゐる。「朝鮮日報」一月十八日によると、金大中・盧武鉉政権の十年間に韓国から北朝鮮に提供された援助総額は六九億五、九五〇万ドルで、年平均約七億ドルに達した。それに対し、李明博政権の三年間は開城工団への賃金支払い分のみで、年五、〇〇〇万ドルに止まつてゐる。七、一％に過ぎない。韓国の対北援助の急減は北の対中傾斜を促進した。——中国軍の羅先特区駐屯説もその延長上にある。

李明博政権の対北強硬姿勢の背景には、世論、特に若い世代の反発が強いことが指摘される。

それを象徴するのが、人気タレントのヒョンピンの海兵隊志願であろう。一月の海兵隊募集では競争率が過去最高の四・五倍に達した。我々がソウル滞在中に浦項で訓練所入営式があつたが、ヒョンピンを歓迎する垂れ幕が下がり、ファンが殺到した。その中には日本人女性も混じつており、インタビュ

ウに二人が応じていた。

我々が会つたジャーナリストは、「韓国軍は北の挑発を待つてゐる」と言つていたが、北はそれを意識し、青瓦台のサイトへの攻撃等、韓国側に口実を与えない範囲内の揺さぶりを掛けてゐる。そのため、当面は武力衝突には至らないと見られる。

今回の訪韓で印象深かつた話の一つに、韓国核武装論がある。今年に入って、金大中朝鮮日報顧問や「元祖保守」と呼ばれる金容甲議員から韓国核武装論が主張されたが、我々が会つた保守系ジャーナリストも「世論調査では七〇％が核保有に賛成しており、自分も賛成である。韓国は日本と核開発で共同歩調を取ると良い。米国も最終的には日本の核武装に反対しないだろう。次回の大統領選挙では核武装論を争点の一つにしたい」と主張していた。

この主張について、我々がセミナーを持ったある研究院の若手研究者に質問したところ、全員が慎重論であつた。また、別のジャーナリストは「北が脅しの材料として核を使つてゐることは事実であるが、韓国が持つとしても米・中・日との関係調整が必要で道は遠い。大統領選挙の争点にはならないだろう」との反応であつた。

韓国における核武装論議が今後どう進むか、日本としても関心のあるテーマでもあるので、鋭意注目していきたい。

（のぞえしんいち・アジア研究所所長）